

序

持続可能な社会と鍼灸

社会鍼灸学研究会代表 洞峰パーク鍼灸院院長
形井秀一

「持続可能な社会」とは、何とも妙な表現だなと感じてしまう。社会は過去から未来へ持続するものであり、もし、社会を修飾する言葉を思いつくとしたら、「より良い」や、「住みやすい」、「発展する」、などのはずだが……。社会は、私が今ここに、この瞬間、存在していることを前提として、「あり続けている」はずだと思込んでおり、それ故、自分が存在し続けていると思える間は、社会は、存続は問題ではなく、その中身そのものについて考える対象だったはずだ。

しかし、そう思込んでいた社会が、持続しない可能性があることを前提として、「持続可能な開発」を考えようとするのが **SDGs : Sustainable Development Goals** である。その目標として、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す17のゴール・169のターゲットが掲げられている。

社会が持続しない？

その疑問だけでも、分散する思考を集中させるに十分なインパクトがある。人間社会は、このまま発展し続けると、早晚、持続しないで、終焉してしまうというのである。

そして、SDGsという言葉はさらに、持続しないのに、なおかつ「開発」は続けるのか？という、次なる疑問を生じさせ、考えさせるという二重構造になっている。これは、人間社会の複雑さをも含意する言葉なのであろうかと、小さな「s」をつけた「綴り」の面白さとともに、その名前の奇妙な違和感が尾を引く。

さて、そのSDGsと鍼灸である。

もちろん、SDGsの169のターゲットのなかに鍼灸はない。しかし、SDGsの精神を考えると、自然を克服することが人類の幸せであると信じてヒトの種のみ的发展を目指し、自然を自分たちの都合の良いように、開発する対象としてきた歴史を反省しているのであろうと思う。発展を果たした少数の国々が、発展途上国の資源を、自分たちの欲望と幸福とやらのために消費するのではなく、資源国の幸福のためにも、資源利用から得た利益を還元してあげましょうというキャンペーンなのであろう。「資源」である「自然」は、人類が平等に利用し、平等に恩恵を受ける権利のあるものという考えの下に、「自然」であることができるということだろうか。

鍼灸は、人類がまだ自然に近い状態で生活している時代に成立した医学である。だから、持続可能などと言う事を考える必要がなく、鍼を作るのに地下に埋もれている鉱物を取り出しても、高が知れていた時代であった。しかし、今や、地球の地下資源の埋蔵量の心配をしなければならない時代である。

鍼は、人間の治癒力に働きかけて健康を維持することを目的とする治療方法である。人間の中に埋もれている治癒力(健康を維持する「自然の資源」)を賦活させる治療法だから、最も自然に優しい医療であると考えていた。しかし、現代においては、鍼治療の回数が増えれば、ディスプレイの鍼の製造に地球の金属を使う量が多くなる。治療後には、鍼体用の金属だけではなく、プラスチックなどの廃棄物が出る。灸治療が増えれば、加工灸の様々な用具からも廃棄物が出る。こうなってくると、鍼灸は、「人間の内部の自然」に働きかける、自然に優しい療法であるという謳い文句が俄に怪しくなってくる。とどのつまり、鍼灸治療をすることは、自然から収奪をすることであるし、廃棄物も出すことになる療法でもあるわけだ。そんな問題点も考えながら、鍼灸治療の今後の発展を考えたい。

鍼灸を、一度、SDGsな視点で見直してみるのも、必要なことであろう。